(2) 取組指針(案)

１．美しい風景づくりを進める上での課題

1)プロセスの課題

四国各地の現状を見ると、身近な場所に、様々な資源があるにも係らず、地域の方々がそのことに気付かず、取り壊されてしまったり、地域になじまない建物や構造物ができてしまったりするケースが見られます。

また、本物の資源が有する価値をさらに高める努力を怠り、利便性やコストといった目先の利益を求めたために、本物の価値を逆に下げてしまっているケースも見受けられます。

さらに、景観に関するマスタープランを作成したものの、計画を作成することそのものが目的化し、その作成に住民等が係っていないため、住民の「地域づくりの方針」となっておらず、具体的な取り組みが展開できないというケースも見られます。

こういった現状は、風景づくりの「プロセス」に問題があると考えられます。地域にとっての美しさとはなにか、身近にある資源にどのような価値があるのか、そしてそれをどのように磨き、活かしていくべきかといったことを十分に地域内で話し合い、将来を描くプロセスが必要です。

【プロセスの課題】

- ○地域住民自身が、地域の魅力やらしさに気付く必要がある。
- ○地域住民自身が、何とかしたいという思いを抱き、共有することが必要である。
- ○次の世代にどのように資源や風景を残していくのか、ビジョンを描く必要がある。

2)意識の課題

美しい地域づくりのための活動を点から線へ、線から面へと広げていくことによって、地域全体の風景が変わってきます。しかし、一部の住民しか地域の良さを理解していない、さらには、一部のリーダーのみが頑張っていて、地域住民に活動がなかなか広がらないといったケースが見られます。

また、その背景にはそのような活動をしても効果が見出せない、それは行政がやることであって自分達がすることではない、活動を続けていくことが大変である、といった住民の意識が大きく作用しています。

【意識の課題】

- ○地域住民や関係者一人ひとりに、風景を守り、つくり出していくことの意義を理解してもらう必要がある。
- ○地域の資源に価値を見出し、それを高め自立した活動へと高めていく必要がある。
- ○一過性の取組ではなく、先を見据え活動を続けていく必要がある。

3）取組の課題

活動を始めたものの、だれがどのような役割を担えばよいのか、活動資金はどのように捻出すればよいのか、など現実的な問題に直面します。また、個々人が個別に活動を進めていて整合性が図れていないとか、複数の組織がバラバラに活動しており連携が行えていない、さらには関係機関との協議が進まないといった、体制面での問題、組織相互の関係性の問題も顕在化しています。

こういった「人材」、「組織」、「資金」などの、具体的「取組」を進める上での課題への対応が求められます。

【取組の課題】

○動いているのは限られたメンバーばかりであり、それぞれの活動を展開していくにふさわしい人材を確保する必要がある。
○資金が限られている中においても、活動が動いていく仕組みが必要である。
○活動をより効果的に推進していくための体制作りが必要である。

２．プロセス・意識・取組の観点からの取組指針

1）取組指針の視点

プロセス・意識・取組の3つの観点から課題を抱える地域が風景づくりの活動を進めるに際して、「地域の魅力の再発見」から始めるための具体的コツやポイントを示すことが重要となっています。

また、有名な観光地などの資源だけでなく、地域住民の方々が日常の生活環境にある魅力を発見し、それを地域の魅力として認識し、保存や育成していく取組を始めることができるようにすることが大切です。

取組指針では、風景づくりに係る活動がうまく展開されている地域の状況を「人」に着目して把握し、プロセス・意識・取組の３つの視点から、分かりやすく理解できるよう整理しました。

2）取組指針作成に際しての取材先

各地域の抱える課題に応じた対応策を見出すため、これまで風景づくりの活動に一定の成果を挙げている地域への取材を行いました。

後に、紹介する取組指針は、こういった地域における人々・リーダーの行動や考え方をベースに作成しています。

事例	地区	組織名
1	香川県東かがわ市引田地区	NPO 法人東かがわ市ニューツーリズム協会
2	徳島県徳島市	NPO 法人新町川を守る会
3	徳島県名西郡神山町	NPO 法人グリーンバレー
4	高知県室戸市吉良川地区	吉良川町並み保存会
5	高知県幡多郡黒潮町	NPO 法人砂浜美術館
6	高知県高岡郡四万十町	株式会社四万十ドラマ
7	愛媛県南宇和郡愛南町	柏を育てる会
8	愛媛県宇和島市遊子地区	NPO 法人段畑を守ろう会
9	愛媛県喜多郡内子町石畳地区	石畳を思う会
10	香川県香川郡直島町本村地区	ベネッセアートサイト直島

事例１：香川県東かがわ市引田地区

1) 組織(団体)の概要

(1) 名　　称：特定非営利活動法人　東かがわ市ニューツーリズム協会

(2) 設立主旨：地域に根ざした、長続きする、新しい観光・交流のあり方(ニューツーリズム)を中心となって研究し、実践する組織として、NPO法人東かがわ市ニューツーリズム協会は設立されました。 私たちは、東かがわ市にある小さくともキラリと光る資源を最大限に活かし、住んでよし、訪れてもよい、「持続可能な観光地」づくりを目指します。

(3) 所 在 地：〒769-2901　香川県東かがわ市引田2163

(4) 設　　立：2005年（平成17年）4月ＮＰＯ法人の認証取得

(5) 活動概要：ニューツーリズムに関する事業として、「引田ひな祭り」や「風の港まつり」の開催をはじめ、観光ボランティアガイドや「讃州井筒屋敷」の管理運営、オリジナル商品の開発販売等の展開を行っている。

2) キーパーソン

東かがわ市引田地区のまちづくりのキーパーソンは、現在、東かがわ市ニューツーリズム協会の理事長である大字數義さんである。大字さんは、旧引田町商工会を 35 年、東かがわ市商工会議所会長１年を経て東かがわ市ニューツーリズム協会に就任。自治会長も 15 年間務めており、文字通り地域の「顔」である。

そして、この大字さんサポートするのがもう一人のキーパーソンである赤澤正己さんである。赤澤さんは、東かがわ市職員。東かがわ市ニューツーリズム協会発足時から出向して事務局長を務める。大字理事長を「師」と仰ぎ、地域住民の活動を支え、行政とのパイプ役として活躍されている。

事例２：徳島県徳島市（新町川を守る会）

1) 組織(団体)の概要

(1) 名　　称：特定非営利活動法人　新町川を守る会

(2) 設立主旨：「できる人が、できる時に、できることを」を活動の基本とし、新町川を中心にした徳島の川全体を、みんなの手できれいにして魅力的なまちづくりを目指す。

(3) 所 在 地：〒770-0832　徳島県徳島市寺島本町東１丁目17

(4) 設　　立：1990年（平成2年）※法人化は1999年（平成11年）

(5) 活動概要：新町川を守る会では、新町川のほか、助任川、田宮川や、吉野川などを中心とした活動として、「リバークルージング活動」「クリーンアップ活動」「リバーサイド修景活動」「イベント活動」を行っている。

2) キーパーソン

ＮＰＯ法人新町川を守る会のキーパーソンは、理事長の中村英雄さんである。中村さんは守る会の当初からのメンバーでもあり、活動をはじめてから 20 年近くが経過するが、初心を胸に、川を守り、川からのまちづくりを進めていきたいと精力的に活動を行われている。

事例３：徳島県名西郡神山町（グリーンバレー）

1) 組織(団体)の概要

(1) 名　　称：特定非営利活動法人　グリーンバレー

(2) 設立主旨: 芸術や文化によって地域課題を解決し、経済的に自立した持続可能なコミュニティを作ること。

(3) 所 在 地：〒771-3310　徳島県名西郡神山町神領字中津 106

(4) 設　　立：2004 年（平成 16 年）

(5) 活動概要: グリーンバレーにおいて、芸術や文化をテーマとして「神山アーティスト・イン・レジデンス」や「神山アート」「神山インターンシップ」といった芸術家とのコラボレーション事業や大学との連携事業を展開している。また、町への移住支援事業「ワーク・イン・レジデンス」の展開も行っている。

2) キーパーソン

NPO 法人グリーンバレーのキーパーソンは、理事長の大南信也さんである。1990 年、神領小学校の PTA 役員だった大南さんは、青い目の人形「アリス」の贈り主捜しを提案し、PTA が中心となって「アリス里帰り推進委員会」を立ち上げ、人形の里帰りを実現させた。

この活動は、「神山町国際交流協会」設立に発展し、徳島県「国際文化村構想」を契機として、現在の「グリーンバレー」へとつながっている。人を強制せず、人に強制されず自由な姿勢で「せかいのかみやま」づくりに、日々奔走されている。

事例４：高知県室戸市吉良川

1) 組織(団体)の概要

(1) 名　　称：吉良川町並み保存会

(2) 設立主旨: 平成 9 年文部省より重要伝統的建造物群保存地区に選定された吉良川町の歴史的文化遺産を保存活用し、次代によりよい環境で継承させるとともに個性ある豊かな町づくりに努めることを目的として設立。

(3) 所 在 地：室戸市吉良川町

(4) 設　　立：1996 年（平成 8 年）

(5) 活動概要: 市民ボランティア活動として、情報誌の発行、ひな祭りの開催、ボランティアガイドとその研修、まちなみ館の管理、休憩所の運営を行っている。

2) キーパーソン

吉良川のキーパーソンは細木敏美さんである。平成 19 年まで、保存会の会長をされていた細木さんは、平成 4 年に、家業を継ぐために吉良川へ戻ってこられ、現在、事務局として吉良川町並み保存会で活動されている。

そして、もう一人のキーパーソンは室戸市教育委員会の和田庫治さんである。和田さんは、活動当初から吉良川の町並み保存に携わってこられ、伝建制度の特性である住民と行政の協働による力を発揮し、町並みの保存・活用を維持できるように日々努力を重ねておられる。

事例５：高知県幡多郡黒潮町（砂浜美術館）

1) 組織(団体)の概要

(1) 名　　称：NPO 法人　砂浜美術館

(2) 設立主旨:「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です。」というコンセプトのもと，身近な資源を「作品」化し，新しい価値観を創造する企画や情報発信を行っています。この活動は，豊かに，気持ちよく，そして楽しく暮らしていくためのひとつのものの見方を伝える活動です。

(3) 所 在 地：〒789-1911　高知県幡多郡黒潮町浮鞭 3573-5
ビオスおおがた情報館内

(4) 創　　業：1989 年（平成元年）※砂浜美術館のスタート

(5) 活動概要: 美しい砂浜を砂浜美術館とし、この地域資源を中心として「Ｔシャツアート展」をはじめとするイベントや、「ホエールウォッチング」「エコツーリズム事業」などを行っている。

2) キーパーソン

砂浜美術館のキーパーソンは、現在、事務局で活動をされている村上健太郎さんである。村上さんは、まちおこし活動に当初からかかわってこられ、活動の発端となった地元の役場や商工会、商店の人などで構成された「砂美人連（サミットレン）」のメンバーでもある。

事例６：高知県高岡郡四万十町（四万十ドラマ）

1) 組織(団体)の概要

(1) 名　　称：株式会社四万十ドラマ

(2) 設立主旨: 四万十の天然素材を活かした商品開発で地域の活性化

(3) 所 在 地：〒786-0535　高知県高岡郡四万十町十和川口 62-9

(4) 設　　立：1994 年（平成 6 年）

(5) 活動概要: 天然素材を活かした商品開発とその商品の小売・卸売を行う。また、会員制度の「ＲＩＶＥＲ」や「自然の学校」などの事業展開を行っている。

2) キーパーソン

四万十ドラマのキーパーソンは、代表の畦地覆正さんである。畦地さんは、もともと地元の農協に勤務していたが、生産者や顧客の顔を見ながら活動的に仕事がしたいとの想いから退職し、四万十ドラマ創業期に入社した。四万十川流域の地域おこしに取り組み、地域資源に付加価値を付ける形で商品開発を行い、販路の拡大を図ってきた四万十ドラマ成功の立役者である。第３セクターとして創業した四万十ドラマは、平成 17 年に完全民営化し、現在は畦地さんが代表取締役に就任し、パートを含めて 20 名で運営している。

事例７：愛媛県南宇和愛南町（柏を育てる会）

1) 組織(団体)の概要

(1) 名　　称：柏を育てる会

(2) 設立主旨：昭和 59 年に、農山漁村地域生活環境改善対策事業モデル地区として、内海村柏地区が指定され、地域のシンボルづくりに地区の住民総出の共同作業によるへんろ道の復元を目的として『柏を育てる会』が結成された。道をとおして愛南町内をはじめ周辺地域との連携を図り、交流を深めること及び広く全国に向けて『豊かな自然が集う町・愛南町』をＰＲしていくことを目的とします。

(3) 所 在 地：〒798-3701　愛媛県南宇和郡愛南町柏

(4) 創　　業：1884 年（昭和 59 年）

(5) 活動概要：へんろ道を中心とした地域づくりの活動として、旧へんろ道の復元と「トレッキング・ザ・空海」や「花へんろコンサート」「花へんろ文化講習会」などの開催を行っている。

2) キーパーソン

愛南町では特にキーパーソンと言う特定の人材を指し示すことはせず、組織や地域全体が活動を進めているという認識を持っており、ここではあえてキーパーソンをあげていない。

事例８：愛媛県宇和島市遊子地区（段畑を守る会）

1) 組織(団体)の概要

(1) 名　　称：NPO 法人　段畑を守ろう会

(2) 設立主旨：水荷浦段畑の自然景観の保持と環境保全を推進し、後世に伝え残すことを目的とする。

(3) 所 在 地：〒798-0103　愛媛県宇和島市遊子 3625

(4) 設　　立：2007 年（平成 19 年）※ＮＰＯ法人化

(5) 活動概要：シルバー人材センターの事業として段畑の整地を行う。収穫祭として「ふるさとだんだん祭り」や「段畑夕涼み会」の開催、オーナー制度の展開を行っている。

2) キーパーソン

遊子水荷浦のまちづくりのキーパーソンは、「段畑を守ろう会」の副会長松田鎮昭さんである。松田さんは、松山で仕事をされていたが、平成 11 年から土日など休みの日を中心に、賛同者代表として活動に参加されている。その後、宇和島に帰ってこられて、重要文化的景観である段畑の保全を第一義に、常に戦略を考え、地域の意識改革に取り組まれている。

事例９：愛媛県喜多郡内子町石畳地区

1) 組織(団体)の概要

(1) 名　　称：石畳を思う会

(2) 設立主旨：地域固有の資源を発掘し、それに磨きをかける活動行っていく。「自立」を旗印に自分たちのやりたいことを行う会とする。
入会勧誘などは行わず、本当に自分からやりたいと思う人だけが集まる自主性を重視する団体を目指す。

(3) 所 在 地：〒791-3343　愛媛県喜多郡内子町石畳 2910（事務局）

(4) 創　　業：1987 年（昭和 62 年）

(5) 活動概要：村並み保存の活動として、「水車」の復元と「石畳清流園」の整備、これらの地域資源を活かした「水車まつり」や「しだれ桜まつり」、古民家の移築による「石畳の宿」の開業・運営、企業組合「石畳むら」によるそば店の展開を行っている。

2) キーパーソン

内子町・石畳地区のまちづくりのキーパーソンは、石畳を思う会の事務局長として日々地元で活動されている宝泉武徳さんである。石畳を思う会の結成時（当時は最年少であった）から参加し、現在は事務局長として、まさに石畳地区を東奔西走されている。

そして、もう一人は、石畳を思う会の発足のきっかけをつくり、活動の指南役としても奔走した岡田文淑さんである。石畳地区の村並みづくりだけでなく、八日市・護国地区の町並みづくりなど内子町の各地のまちづくりに深く関わってこられた文字通り「内子町のまちづくりの顔」である。

事例 10：香川県香川郡直島町本村地区

1) 組織(団体)の概要

(1) 名　　称：ベネッセアートサイト直島

(2) 設立主旨：瀬戸内海の風景の中、ひとつの場所に、時間をかけてアートをつくりあげていく……。直島の自然や、地域固有の文化の中に、現代アートや建築を置くことによって、どこにもない特別な場所が生まれます。都会の喧騒から離れて、心にも身体にも元気を与え、安らぎを感じさせるこの環境の中で、人間が真に「よく生きる」とは何かを考える場所をつくりたい。

(3) 所 在 地：〒761-31102　香川県香川郡直島町

(4) 設　　立：1989 年（平成元年）※直島国際キャンプ場オープン

(5) 活動概要：ベネッセハウス、家プロジェクトなど多くの事業展開の中で、本村地区では、「古民家の改修活用」「屋号計画」「のれんプロジェクト」などの事業展開を行っている。

2) キーパーソン

ベネッセアートサイト直島におけるキーパーソンは、「ベネッセアートサイト直島」の笠原良二さんである。笠原さんは、岡山大学の学生だったころから、直島のサマーキャンプの運営に携わっていた。その後、ベネッセ（当時：福武書店）に入社。それから数年後、ベネッセハウスができ、1993 年から担当者として、企業が行政と共に地域再生に係わる姿・取組みを見てきた人物である。

笠原さんは、「自分達が一生懸命やってきて、何が良かったのか、効果がなかったのか、正直わかっていない」「『企業の取組み』において、直島では、企業単独ではなく町との共同で取り組んできたと」いうことが大きな特徴であると語る。

3）取組指針骨子

各地域にて、風景づくりの活動を進めて行く上での課題と、それに対する取組指針を一覧表で整理した。

【取組指針インデックス】

	症状	取組指針
■プロセス	何から始めてよいかわからない	～1．資源の良さを再発見する～
		■まずは、みんなで歩き、印象を語り合う
		○地域資源を見直す（見つめなおす）
		○みんなで勉強する
		○夜なべ談義（夢やアイデアを語る）をやってみる
	地域のよさに気付いていない	■外の人の声を聞く
		○地域外の人の声に耳を傾ける（こちらから知ってもらう努力もする）
		○すばらしいといわれる地域の評判に接する
		○外国人の声を聞く
		■ものの見方を変えてみる
		○古くからの風習を見直してみる
		○素人ならではの自由な発想をしてみる
		○視点を変えてみる（視点を変えると価値観が変わる）
		○今まで捨てていたものを見直してみる
		○知恵を絞る
		○しっかりとした「考え方」「コンセプト」を持つ
		■暮らし（＝本来のよさ）を見せる
		○本来の地域の素材を活かす努力をする（引き算型のまちづくり）
		○地域の営みそのものが地域のブランドとなることに気付く
		○村人にとって何でもない風景を評価したことが始まり
		○自然の魅力を求めて人は集まる
	何をするにも「難しい」という思いが先行する	～2．思いを共有する～
		■小さな成功を目指し、喜びを分かち合う
		○達成感、成功体験を共有する
		○一つのことをやり遂げ、成功することで人はついてくる
		○みんなでイベントの復活を祝う
		■決して NO といわない
		○何かに取り組むとき、無理だとはいわない
		○大風呂敷を広げてみる
	どうすればよいのか思いうかばない	～3．ビジョンを描く～
		■思いをひとつにした専門家とともに進めてみる
		○自分たちも専門家に思いを伝える集まりを開く
		○地域（住民・企業）の活動を行政のプランのなかに位置づけてもらう
		■オリジナルなビジョンを目指す
		○自分たちに何ができるかというところから発想する
		○ここ（地域、地元）にしかないものにこだわってみる

	症状	取組指針
■意識	地域のよさに気付いていない	～1．周りの住民の意識を変える～
		■根気強く対話する
		○一人ひとりに熱意をもって接してみる
		○まずは一人を口説いていく（膝を突き合わせて話をする）
		○土地柄を理解して根気よく対話してみる
		○そうすることの意義を何度も話あう
	人頼み、行政頼みになっている	■自立（自律）の精神を育てる
		○企画段階から自分たちの思いを固めておく
		○補助金に頼らないなど、自律を第一とする
	どう人を動かしてよいかわからない	■イメージを伝え、戦略的に発信する
		○人の心を動かすイメージ戦略を考える
		○高い評価を受けて、地域の自信と誇り、やる気を生み出す
		○イマジネーションを広げて、戦略的に発信していくことを考える
	そんなことをやってどうなるのかといわれる 飯が食えるのかといわれる	～2．価値を考えてみる～
		■風景や文化でも飯を食える
		○ビジネスに結びつけることができることを説明する（10年続ける覚悟も説明する）
		○ボランティアという意識ではなく、ビジネスという意識を持つ
		○負のものにも新たな価値があることを示す
		■自分たちの資源が持つ価値を意識する
		○地元の常識（日常）と外の人の非常識（非日常）の闘い
		○常に地域の資源に価値を見出す
		○子どもたちに伝える努力をする（次代に引き継いでいくことを考える）
	活動が続かない 一部のリーダが頑張っても地域住民にひろがらない	～3．活動を続ける楽しさを伝える～
		■苦しい時に支えてくれる仲間
		○単なる仕事にならないように、楽しむ感覚を持ち続ける
		○失敗や行き詰まったときに残る仲間が本当の仲間
		■10年続ける覚悟で進める
		○10年続けると見方がかわってくる
		○10年を経て、受け入れられた「本気」
		■仲間を増やし、活動を拡大させる
		○小さな活動が大きな成果となり、連鎖反応を起こす
		○成長し続ける回路として歩み続けること
		○自ら守り、育てる活動の連鎖を生み出す
		○住民総出の協働が生み出したパワー
		○無理に強要しないのも継続のコツと心得る

	症状	取組指針
■取組	お金がない	～1．お金はめぐってくると信じる～
		■気持ちの交換を図る
		○他のもので代替できないかと考える
		○相手をよくしてあげようとする社会貢献の意識をもつ
		■お金がなくてもやりたいものをやる
		○補助金よりもソフトを磨き上げる
		○地域がよくなることが自分たちへの配当と考える
	人づくりをどうすればよいのかわからない	～2．ひとづくりを第1に考える（さがす、つくる、呼び込む）～
		■資質の違うリーダと補佐役を探す
		○地元とのパイプ役、行政とのパイプ役をさがす
		○情熱のある人を探す、相談できる人を探す
		■地域外のファンをつくる
		○地域外とのネットワークの仕組みを考える
		○外部からおもしろい人をひっぱってくることを考える
		○イベントを支える人（地域の外交官として活用）
		○地域外から訪れる人を増やす工夫（オーナー制度など）
		○インターンシップで学生（＝若者）を受け入れてみる
	組織をどのように立ち上げればよいかわからない	～3．地元主体の組織をつくる～
		■中心的役割を担う事務局組織をつくる
		○運営の根幹に関ることは事務局で、各事業は中心人物に任せる体制をつくる
		○リーダーやメンバーがのびのび活動できる組織をつくる
		○団体や組織は一本化して強化する
		■主役は普通の人
		○地域で普通に暮らす人を先生に活用する
		○肩書きで人を選ばない
	行政との付き合い方がわからない	～4．地域と行政の関係を築く～
		■地域と行政の役割を決める
		○できることできないことをきちんと踏まえる
		○持続的な活動のための仕組みを用意する（指定管理者制度などの活用を地域と行政で考える）
		■地域主導で行政と連携し活用する
		○地域の活動を行政がバックアップする関係を築く
		○情報と知識を一番持っている行政マンとつながる
	周辺地域や他地域とどのようにすればよいかわからない	～5．連携しあうことで可能性を広げる～
		■連携によって活動を広げる
		○連携し合うことで発信力を広げる・高める

プロセス

～１．資源の良さを再発見する～

■まず、みんなで歩き、印象を語り合う

景観形成や風景づくりに取り組むとき、まず自分達のまちや資源を見つめ直すことから活動をはじめたい。昔に比べて自分達の地域はどんな風に変わったのか、将来どうなってしまうのか。様々な立場の人が、それぞれの視点を持って地域を歩き、印象を語り、問題点を考えることが大切である。

○地域資源を見直す（見つめなおす）～高知県高岡郡四万十町～

四万十ドラマの畦地さんは、当初「まずは地元の資源を見直そう」と考えた。地域にはどんな人がいて、どんなことをしているのか、産物は何があって、どのように販売されているのか、といったことを見つめ直すことからはじめた。「十和村のお茶や椎茸」「四万十川の沈下橋」「三町村の『ヤイロ鳥』」など、畦地さんの目に映る様々なものは、実に面白い人やモノ、すばらしい自然であり、地域の宝物がそこにあった。

○みんなで勉強する～香川県東かがわ市引田地区～

旧引田町商工会会長であった大字さんは、「未来づくり懇談会」を立ち上げた。大字さん自身が懇談会の会長を務め、農協、漁協、議会などに声をかけ、13 名のメンバーで勉強会を重ねることとなった。「未来づくり懇談会」の立ち上げに際しては、香川県に相談を持ちかけ、ワークショップなど、みんなの声を集め、まとめていく手法を学んだ。

○夜なべ談義（夢やアイデアを語る）をやってみる

～愛媛県喜多郡内子町石畳地区～

内子町の「石畳を思う会」は、夜な夜な民家に集まり、地域づくりの夢やアイデアを語る夜なべ談義が開かれた。そして、その中から「水車」の復元に取り組むアイデアが生まれた。この活動が内外から高い評価を受け、地区に暮らす自信と誇りとなった。地域住民の夢やアイデアを語る会の継続的な実施が前向きで自立的な活動につながっている。

四万十川中流域・十和村はお茶処。朝霧が深くお茶の栽培に適した地域で、今でも、段々畑ばかりなので「手摘み」でお茶を摘んでいる。

■外の人の声を聞く

地域の活動を行う時、どうしても内側にこもりがちになり、閉鎖的な状態に陥ることがある。素直な気持ちでいろんな人の声を聞く。同じような悩みや問題を抱える地域がたくさんあることを知る。地域外の人がどのように自分たちの地域を見つめ、何を求めているかを知ることが大切である。

○地域外の人の声に耳を傾ける（こちらから知ってもらう努力もする）～高知県高岡郡四万十町～

「もっと三町村のことを知ってもらいたい」

三町村の担当者はその思いを原動力として、試行錯誤を続けた。そして、「四万十川をまん中に、豊かさを考えるネットワーク」という考え方で、情報誌「ＲＩＶＥＲ」を通じて、自分達が発掘した地域に住む人びとの生活や産物をダイレクトに“実況中継”することで、失いつつあるもの、残していくべきこと、これからなすべきことを、地元は地元の立場で、都会は都会の立場で、真剣に考えていこうというものである。

四万十ブランドは、いくつかの新聞やアウトドア情報誌に紹介され、会員も最大時で約 1,000 人に上り、その会員からは、「最後の清流を守りたい」「四万十川を次の世代に伝えたい」「自然を大切にしたい」といった数多くの声が寄せられている。

情報誌「RIVER」

○すばらしいといわれる地域の評判に接する

～高知県室戸市吉良川地区、愛媛県宇和島市遊子地区～

現在、重要伝統的建造物群保存地区に指定されている吉良川では、当初自分達の町並みに価値があるなんて、誰も考えていなかった。「高知県で伝統的建造物が残っているのはここだけではないか」大学教授や建築士などの専門家が声をあげたのが、自分達の町並みを見直すきっかけとなったが、それまで当たり前の風景として見慣れていた住民にとっては、まさに寝耳に水といったところであった。

重要文化的景観に指定された遊子も、景観を守る活動のきっかけは外の人の声であった。「耕して天に至る、段々畑」と親しまれた美しい景観も、平成 10 年頃から段畑の頂上付近が耕作放棄され荒れ始めた。このままでは、段畑が消えると危機感を覚え始めていた時、文化庁の審議官が宇和島築城 400 年のイベントで「こんな風景は全国でここしかない。頑張って残しましょう。」と段畑の素晴らしさを指摘したのである。

○外国人の声を聞く～徳島県名西郡神山町～

神山町のアーティスト・イン・レジデンスでは、外国人に芸術活動の場を提供している。外国人アーティストは、神山に来たいと言うが、本音は神山ではなく、日本に来て、日本で制作をしたいという希望が非常に多いことがわかった。徳島には藍染や和紙の技術がある。北斎への憧れもある。ところが、神山のように比較的経済的に、長期間にわたって制作、滞在できる場所の情報が世界に対して開かれていないのが現状である。英語のサイトが少ないのが致命的であり、日本に滞在しようと思えば、日本人の友達などを通じて滞在場所やアトリエなどを紹介してもらう以外に方法が少ないのが原因であると考えられる。現在、アーティスト・イン・レジデンスで３人のアーティストの受け入れ募集に多いときには百数十名、コンスタントに 90 名ぐらいの応募がある。

吉良川町伝統的建造物群保存地区

■ものの見方を変える

自分たちの日常生活から生まれてくる価値観だけでは、どうしても同じ発想でしか物事を見たり、判断したりすることしか出来ない。そんなとき、全く違った視点で見つめ直してみると、同じものが全く違った姿に見えることがある。姿形が変わらずとも、違った価値が生まれることがある。

○古くからの風習を見直してみる

～香川県香川郡直島町本村地区～

直島町本村地区では、家の呼称を「でんさく」「おおみやけ」などと屋号で呼び合っていた。しかし、昭和に入って新築する家が増えると風習は自然と消滅した。役場が景観整備に伴うアンケートをしたところ、この屋号を復活させてほしいと要望が多くでた。そこで、町を挙げて取り組むことに決めた。これが、「屋号計画」である。各家の屋号をまち並みの中に点在させ、直島屋号のリズムや抑揚をまち並みの中に散りばめ「楽しく住まう」ために、役場と住民が一緒にワークショップを通じて、屋号の活用方法、屋号表札のデザインや設置箇所まで決めていった。

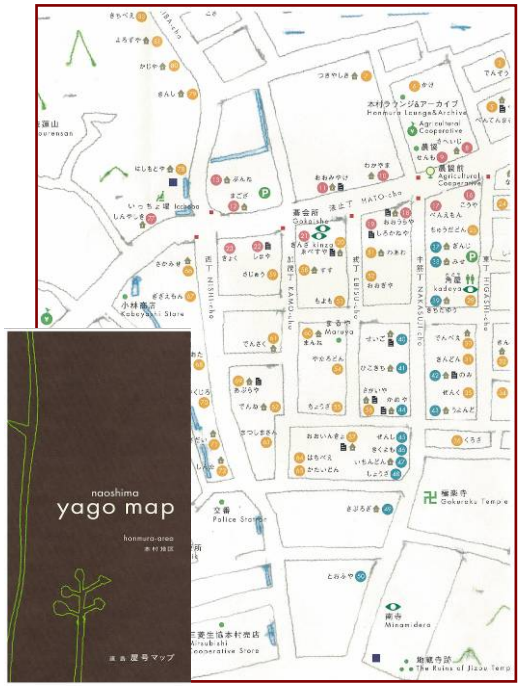
○素人ならではの自由な発想をしてみる

～徳島県名西郡神山町～

NPO 法人グリーンバレーの大南さんは、「何もないところから始めたので、その頃は手探りばかりだった。」と言う。アートに関して素人の自分達が芸術家を呼ぶにも、はじめは何もコネクションがなかった。

県立美術館の学芸員の紹介で２人、あとは、公募からの１名のあわせて３名で、はじめてのアーティスト・イン・レジデンスを実施することができた。今ふり返ると素人ばかりでスタートしたので大変だったが、逆に型に囚われず、型にはまらず、自由な発想でやってきたことが、プラスに作用している。

屋号表札



パンフレットに掲載されている「屋号マップ」

○視点を変えてみる（視点を変えると価値観が変わる）

～香川県香川郡直島町本村地区～

ベネッセが直島で活動を始めた頃、島では“架橋運動”がおこっていた。それが、今では「橋は要らない」という人のほうが増えてきた。

“橋がない島へ訪れる人がいる”ということは、ほかの観光地と比べて目的意識を持って船に乗って、足を運んでくれる人がいるということである。橋を渡ってふらっと行ける場所ではないので、“船に乗る”という行為は、本当に直島へ来たいという人をふるいにかける効果がある。

島の人も、わざわざ来てくれているのだから、もてなしてあげたいという意識を持つ。“島だから価値がある”という人が増えた。

○今まで捨てていたものを見直してみる

～愛媛県宇和島市遊子地区～

「段畑を守ろう会」の焼酎販売のきっかけは次の一言であった。

「さつま芋で焼酎が出来るなら、馬鈴薯でもできるだろう」

半信半疑のまま、業者に聞いてみると簡単に出来る。焼酎＝さつま芋という固定観念が覆された。

また、焼酎の原料として利用している馬鈴薯は、これまでは捨てていたもので、販売で得た利益を地元に還元することができるようになった。

焼酎の名前は「段酌」。これは、「段畑」と特産の「男爵」とをかけたネーミングで、市の広報で一般公募し決定した。このユニークなネーミングと、重要文化的景観というお墨付きの畑でとれた「馬鈴薯」で焼酎を製造しているということで、人気を得ている。

じゃがいも本格焼酎「段酌」

○知恵を絞る～高知県高岡郡四万十町～

四万十ドラマのコンセプトは、「四万十川に負担をかけないものづくり」である。発掘した地域資源に、付加価値をつける形で商品開発を行い、販路の拡大を図ってきた。会社設立時に、まったくの素人だった畦地氏は、デザイナーの梅原真氏に知恵をもらい“産業育成”と“ネットワーク”という２つの柱で四万十ドラマを作っていくこととした。

梅原氏には、「知恵を使って商品にしろ！」と、絶えず言われていた。その中で生まれたのが、「四万十ひのき風呂」である。製材所から出てくるチップとして燃やすしかなかった端材、これを活用するという発想の転換であった。当初、「こんなものが売れるのかな」と思っていたが、ノベルティ商品として広がり、予想を覆す大ヒットとなったのである。

○しっかりとした「考え方」「コンセプト」を持つ

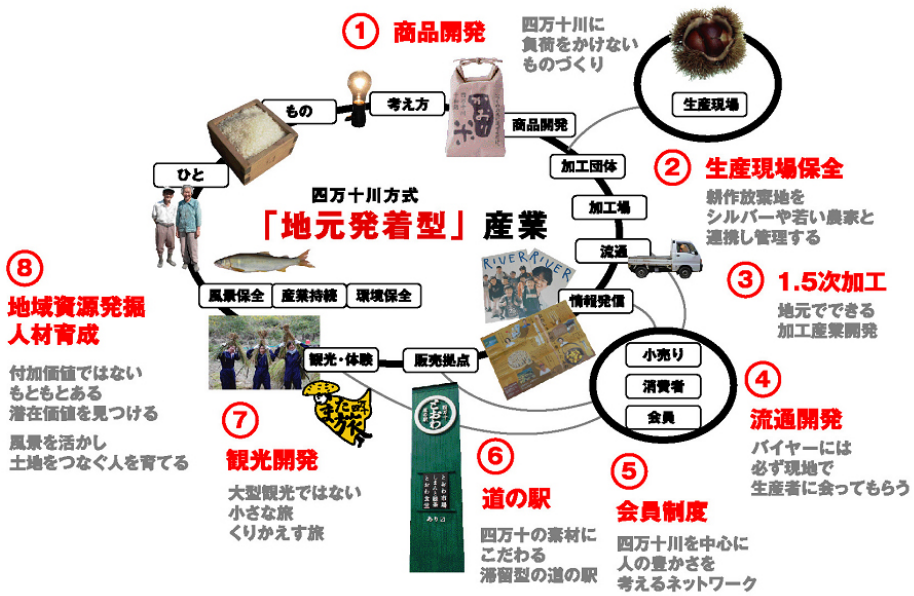
～高知県幡多郡黒潮町～

砂浜美術館の始まりは「T シャツアート展」というひとつのイベントからである。折しも「ふるさと創生」が叫ばれたバブル期。地方の多くが都会の情報に惑わされ、画一的な町おこしや一過性のイベントが溢れていた。このとき大方町（現在、黒潮町）の若者達は、イベントや箱物よりもしっかりとした「考え方」「コンセプト」がなければ本物にはならない、長続きしないと考えたのである。

そして、「何も建物だけが美術館ではない。自分達の町にはきれいな砂浜があるのだから、そこを美術館と考えてもいいのではないか」という発想に行き着いた。

『私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です』

このコンセプトは、自然に恵まれた大方町で豊かに、気持ちよく、楽しく暮らしていくためのアイデアを創出するひとつのものの見方として発展した。



四万十ドラマの「地元発着型」産業のイメージ

■暮らし（＝本来のよさ）を見せる

地域の資源ともに生きてきた自分たちの暮らしに誇りと自信を持つこと。その暮らしぶりに地域に訪れた人たちが心を動かされます。そこに日本の地域に古くからある本物のライフスタイルがあるからです。

○本来の素材を活かす努力をする(引き算型のまちづくり)

～愛媛県喜多郡内子町石畳地区～

石畳という地域は、ごく普通の山村集落であり、全国的に共有される常識的な価値観のもとで地域が営まれている。

地域が元気になる、地域に活力が漲るための必須は「人」でなければならないが、住民個々が持つこれらの常識が、担い手の成長を妨げてしまう。これらの要因を「負」として受け止め、これらの常識に拘ることなく、積極的な排除を通して地域づくりに処することを「引き算型」と読んでいる。さらに、他にも取り除くべき常識には、金権体質、他力本願、多数決民主主義、組織への依存体質、打算と損得を是とする価値観など、多岐にわたる。

アイデンティティとしての地域の景観や特性を維持、発展させるためには、これらの常識を否定し、かけ離れた価値観を礎にして取り組まれる地域づくりを大切にしている。

○地域の営みそのものが地域ブランドになることを気付く

～高知県幡多郡黒潮町～

砂浜美術館の“砂美人連（サミットレン）”は、様々な企画・イベントを展開しているが、高知のデザイナーの梅原真さんは言う。

「ブランドは、結局そこの地域で生きる人の生き方を見せること」

砂浜美術館の活動は、言ってみれば何もないと思っていたものが、「考え方とか出し方でこれだけ楽しく、面白く、地域を楽しくできるよ」ということが一番大事な部分であり、そういう楽しんでいる自分たちの姿というのがおそらく「地域のブランド」になっているのではないかと。

内子町のまちづくり（町並み保存）の歩み

年	月	内　　容
1972 年	7 月	文化庁による第一次集落町並調査が始まる。
1975 年	3 月	アサヒグラフで八日市の町並みが紹介される。
	4 月	八日市町並保存会が 8 名で発足する。
1978 年	3 月	「内子町伝統的建造物群保存地区保存対策調査報告書」（広島大学・鈴木充広教授）策定。
	10 月	内子町伝統的建造物群保存地区保存対策費補助金交付要綱制定（町単独事業）
1980 年	9 月	内子町伝統的建造物群保存地区保存条例制定。
1982 年	4 月	八日市・護国地区が重要伝統的建造物群保存地区として選定される。
1985 年	10 月	内子座修理復元事業竣工。
1986 年	10 月	「内子シンポジウム'86」開催。ローテンブルク市長を招く。
1989 年	4 月	電柱の撤去。（無電柱化）
1990 年	9 月	大村家、上芳我家、本芳我家が重要文化財の指定を受ける。
1994 年	8 月	石畳地区にて「石畳の宿」がオープン。
1996 年	8 月	文化交流ヴィラ「高橋邸」がオープン。
2000 年	12 月	町並み保存センターがオープン。
2001 年	4 月	「優秀観光地づくり金賞」を受賞。
	9 月	ローテンブルク市と友好都市盟約締結
2003 年	11 月	重要文化財「本芳我家」修理着工。
2004 年	10 月	国際記念物遺跡会議民家建築委員会開催（イコモス）。

○村人にとって何でもない風景を再評価したことが始まり

～愛媛県喜多郡内子町石畳地区～

石畳地区の活動のはじまりは、昭和 30 年代まで地区に 30 基あまり存在していたという「水車」の復元に取り組むことであった。この村人にとっては何でもない風景を再評価するところが始まりであった。

この自立的な地域活動はテレビでも放映され、メンバーたちの活動の自信と共に、水車小屋完成をきっかけに地区を訪れる人も多くなり、それとともに地区住民の価値観も少しずつ変わり始め、地区に暮らす自信と誇りがよみがえってきた。この水車は村並み保存による地域づくりのシンボルとして地域の人々に意識付けを行うことにも大きく貢献した。

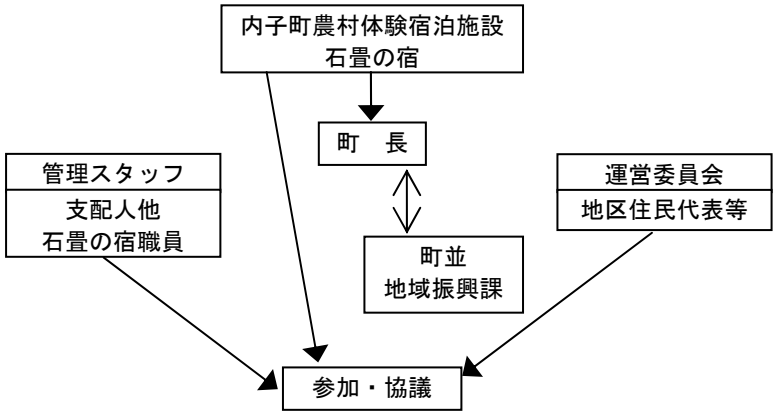
最初の水車の成功は次々に連鎖反応を起こすように、続々と多様な事業の着手を推し進めることとなった。

○自然の魅力を求めて人は集まる～愛媛県南宇和郡愛南町～

柏を育てる会 10 周年の記念イベントとして実施した平成 6 年の「へんろ道ウォーク大会」は、地元だけで開催した。そして、平成 10 年度に内海村 50 周年の企画として「トレッキング・ザ・空海」と名を改めて開催した。予想以上に多くの人が結構たくさん来て「正直言ってたまげるほどだった。」と言う。

「舗装の道でやったイベントには人は来ないのに、山道のイベントにこんなに人が来るなんて。」「自然の資源に魅力を求めて人が集まったのではないか。」

地元だけでやった時は 150 人、村主催行事にしたら 350 人集まった。このイベントをしっかりしたものにすれば、村外の人向けにも発信できるという確信が生まれてきたのである。



（資料：林野庁ホームページ『山村振興優良取組事例』より）

石畳の宿・推進体制図

トレッキング・ザ・空海

プロセス

～２．思いを共有する～

■小さな成功を目指し、喜びを共有する

地域の資源ともに生きてきた自分たちの暮らしに誇りと自信を持つこと。その暮らしぶりに地域に訪れた人たちが心を動かされます。そこに日本の地域に古くからある本物のライフスタイルがあるからです。

○達成感、成功体験を共有する～徳島県名西郡神山町～

1927（昭和２）年３月３日のひな祭り。この日、アメリカの子供たちから日本の子供たちへ、12,739 体の「青い目の人形」が贈られた。人形は、日本各地の小学校・幼稚園に配給され、神山町の神領小学校にもそのうちの１体「アリス」が届けられた。それから長い年月を経た平成２年、送り主を探そうという動きが始まる。平成３年３月３日、神領小学校の PTA が中心となり「アリス里帰り推進委員会」を立ち上げ、同年８月６日～14 日、アリスの里帰りが実現した。徳島県内に、１体だけ残った「アリスの里帰り」は、メディアにも取り上げられ、当時話題となった。現グリーンバレーの主要メンバーがこの時の推進委員会のメンバーに含まれており、アリスを里帰りさせることができたことに対する達成感、成功体験を共有できたのが、今の神山町での活動の礎となっている。

青い目の人形「アリス」

○一つのことをやり遂げ、成功することで人はついてくる

～愛媛県南宇和郡愛南町～

「柏を守る会」がへんろ道を復元したのが 20 年前。当時は、役場を退職した人が、補助事業を住民に下ろそうと、リーダーになって活動していた。活動はその先輩方からトレッキング・ザ・空海へ引き継がれていった。平成 10 年にやった第 1 回の「トレッキング・ザ・空海」の時は、秋の開催だったが、当日も予備日も台風にあたってしまった。

当日、予備日の 2 回とも雨ならば中止するのが普通だが、台風が来ている中で、主な役員に「絶対やめないように」と説いて回った。来ていたマスコミにも「やります」と断言した。それでイベントをやってみたことが今につながっている。地元の熱意があってできたのである。当時のリーダーは不安と言っていたが、成功することで、人はついてくる。

○みんなでイベントの復活を祝う～香川県東かがわ市引田地区～

引田地区では夏の風物詩として花火大会が開催されていたが、合併前の平成 14 年を最後に休止されていた。地域住民からも「いつまで待てば復活するのか！」という不満の声が出始めていた。そこで大字さんは、花火大会を復活させるため実行委員会を組織し、さらに草の根的にボランティア参加や寄付金を提供してくれる人を募った

平成 18 年 7 月 22 日、梅雨の最後の雨の合間に花火がドーンと打ちあがった。「引田 風の港まつり」の復活である。花火を眺めながら参加した地域住民らは、自分達がつくりあげていったという大きな達成感を味わい、手をたたいて花火の復活を喜んだ。「やろうと思えばできる！」

この成功体験は、引田地区にとってかけがえのないものとなり、地域に関わることは何でも自分達でやろうという住民意識の高まりを生み出し始めることになった。

風の港まつり

■決して NO といわない

新しいことや少し困難なことが目前にあると、つい「NO」と言ってしまいがちですが、地域づくりでは「NO」という発想はしない方いい。多様な人や多様な考え方があるからです。たとえどのようなことでも、そのすべてを含めて地域がそこにあるのです。

○何かに取り組むとき、無理だとはいわない

～徳島県名西郡神山町～

NPO 法人グリーンバレーの主要メンバーは活動当初から一緒に活動してきた。今では、メンバーはそれぞれが相談相手になっており、取組に対して少し確信が持てないときなどに、必ず正しい判断を示してくれる。また、何かに取り組むとき、決して「難しい」とか「無理」ということを言わない。

「アートで飯は食えんよ。他に大事なことあるじゃないですか」と言う人が多い。多様なつながりがビジネスにつながる可能性は非常に大きいと考えている。みんながそういうふうにアートを放っておいてくれたら、その間に黙って開拓しておけば、ある時期になると他の人は追いつけない場所までやっていけると考えて実行しているのである。

○大風呂敷を広げてみる～徳島県徳島市～

新町川を守る会のメンバーは、理事長の中村さんを評して「決して『できん』と言わん」という。中村さんは、自分達が楽しい面白いと感じながらイベントを続けていると色んな発想が生まれてくるという。そして、リーダーになる人は、少々どんくさくて実際にはいろんなことができないくらいがいい。これをやるぞと大風呂敷を広げて、よく見たらその風呂敷は穴だらけ。それを見たメンバーは、それなら私はこの穴を埋めましょう、私はここをとどんどん埋めていってくれる感じ。何とかしたいという思いを持っていれば、アイデアがメンバーから出てくると言う。

地元の子どもたちも制作に参加

プロセス

～３．ビジョンを描く～

■思いをひとつにした専門家とともに進めてみる

専門家の協力はいざと言う時に力強いものです。思いをひとつにした専門家は、壁にぶつかったとき、どうしてもうまくいかないとき、羅針盤のように進むべき方向を示してくれる存在です。

○自分たちも専門家にも思いを伝える集まりを開く

～香川県東かがわ市引田地区～

東かがわ市は、「ニューツーリズム」の概念を打ち出していたが、当初は言葉が先走り、東かがわ市のニューツーリズムとは何なのかが白紙の状態であった。そこで、ニューツーリズムの基本方針の策定に取り組む。湯布院のまちおこしにも深く携わり、観光香川２１戦略会議の座長も務めていた猪爪範子氏（地域総合研究所）、香川県地域振興アドバイザーの竹内守善氏を招き、市職員とともに、「自分たちの地域のセールスポイントは何か」をテーマに１ヶ月間に 23 回のタウンミーティングを開催し、住民から意見集約した。

そうして「東かがわニューツーリズム基本方針」が打ち出された。概論を竹内氏が、具体論を猪爪氏が執筆し、東かがわ市におけるニューツーリズムの方向性がようやく示されることとなった。

ニューツーリズムとは

『ニューツーリズム』とは、地域に根ざした、長続きする、新しい観光・交流のあり方です。一過性の非日常型観光ではなく、地域との交流によって、訪れた人の記憶によみがえる観光が「ニューツーリズム」です。

ニューツーリズムを可能にする資源や機会は、歴史や自然資源の保全・活用、産業施設や産品、商店街、文化施設など、あらゆる分野にまたがると考えています。

東かがわ市の観光の目指す方向

- □ 従来の「観光」から「交流」をテーマを主体としたニューツーリズムに転換。
- □ 21 世紀型の「生活・文化・交流都市」づくり。
- □ 歴史や風土、生活に根ざした資源の保全、活用。
- □ 魅力を市の内外に積極的に知らせる。

ニューツーリズムを推進するための展開

1.ニューツーリズム資源の充実
- ・既存資源の保全整備と活用
- ・新たな資源の開発

2.ニューツーリズム推進のための環境づくり
- ・近隣地域、都市住民との交流機会の増大(人が集まりにぎわいを創出する)
- ・情報の発信(地域のイメージづくり)

3.住民参加による地域づくり
- ・住民参加による地域づくり(イベントやワークショップへの住民参加)

4.ニューツーリズム基盤の整備
- ・拠点的な資源・施設の整備(滞在機能(集客力)を持つ施設の整備)
- ・資源ネットワークの形成(拠点と拠点をつなぐルートの開発と整備)

○地域（住民・企業）の活動を行政のプランのなかに位置づけてもらう～香川県香川郡直島町本村地区～

1997 年、町役場からベネッセ側に本村地区に残る家屋の活用法を打診されて始まったのが直島の「家プロジェクト」である。角屋が 98 年、南寺が 99 年に完成した。家プロジェクトが点から線へ。そして、３軒・４軒となった時点で面となり、街並みを美しくして行こうという一つの意識につながっていく。そして、町は住宅マスタープラン（ＨＯＰＥ計画）の中で、直島町の本村地区を「古い町並みを残し景観を整備する地区」と位置づけた。つまり、ベネッセは「家プロジェクト」でまちづくりの半歩先を行くが、民間が勝手にやっていることではなく、町の住環境計画と整合し、ＨＯＰＥ計画において裏づけられたものとした。これにより、次の「家プロジェクト」の展開へとつなげやすくなる。このようにして、ベネッセと町は、民間が少し先行し、それを行政が裏づけをするという形でバックアップしながら進めてきた。

家プロジェクト「角屋」

家プロジェクト「南寺」

家プロジェクト「きんざ」

■オリジナルなビジョンを目指す

自分たちの出来ることを具体的にかかげ、こだわりをもって目標化することが大切です。他人の意見に惑わされずに、自分たちの活動として自信をもって継続することでオリジナルな活動へと成長していきます。

○自分たちに何ができるかというところから発想する

～徳島県名西郡神山町～

神山町では、国際文化村の立ち上げに際して自分達に何ができるかという議論を進め、その結果「環境」と「芸術」の２つの柱が出てきた。

今まで、神山町でも企業誘致などやってきた実績はある。誘致するために土地開発公社で用地の手当てから造成工事までして、さらに工場整備に補助を出す。しかし、誘致したと思ったら、数年で急に工場をやめてしまう。理由は中国で製造した方が安いので拠点をみんな中国に移しましたというような例がたくさんある。

そこで、自分達がやる場合には、資本がなくてもできるもの、撤退しても打撃を受けない仕組みが必要であると知恵を絞った。仮に、アーティストを「工場」と例えた場合に、アーティストに場所を提供し、アーティストが自己完結で製品を作ってもらう。そこでもし、「もう神山、私、気にいらない」と言って、出て行ったとしてもほとんど投資していないので、打撃もなにも受けない。そんな仕組みで国際文化村を運営しようと決めたのである。

○ここ（地域、地元）にしかないものにこだわってみる

～高知県高岡郡四万十町～

四万十ドラマが指定管理者となって運営している道の駅「とおわ」のテーマは「ここにしかないもの」である。可能な限り地産地消にこだわり、食堂の食べ物も基本的に全部手作りである。お土産も単にラベルだけ変えたような商品は置いていない。

何かと競い合うのではなく、自分たちは自分たちのオリジナルでやっていく。自分たちの考え方は、他とは違う。だから、たくさんの人が「ここにしかないもの」というキーワードで集まってくる。

畔地氏は、「自分達の取組みが、他のモデルとなって吸収してもらえればいい」と考えている。「それでも、僕らが一番だから」と。

道の駅「とおわ」

意識

～１．周りの住民の意識を変える～

■根気強く対話する

地域づくりは人づくりとも言われる。その最初の入口は人との対話である。心を通じ合わせるには、熱意や情熱とともに、忍耐強さや根気強さも必要である。信念と誇りを持って、地域の人々と対話を行うことが大切です。

○一人ひとりに熱意をもって接してみる

～香川県東かがわ市引田地区～

引田地区では井筒屋敷が完成し、またニューツーリズム協会は出来たものの、地域住民の意識はまだまだ低く、ボランティア意識や観光に対する意識の向上が課題となっていた。そこで、かつての港での花火大会をみんなで復活させ、その運営そのものを地域で行うことを考えた。

大字さんは、まず実行委員会を組織し、さらに、その主要メンバーと自治会員および各種団体員に対して一人ひとり丁寧に、熱意を持って説明に回った。メンバーの中には 1 人で 100 軒を超えるものもいた。この理事長と実行委員会メンバーによる草の根戦略により、協力者は日を追うごとに増え、引田のまちづくりは、一人の熱意が地域の多くの人々を巻き込み、大きなうねりとなって持続性を獲得しようとしている。

○まずは一人を口説いていく（膝を突き合わせて話をする）

～愛媛県喜多郡内子町石畳地区～

内子町石畳地区では、観念に流されない、“地域の暮らしを基礎とする”、生活の痛みを共有した地域づくりを目指した。

そのために、「まず、一人を口説く」。多くの人を集めて住民説明会などを開催するのではなく、一軒一軒訪問し、膝を突き合わせて語りかける。そうしてとことん語り合って、夢を描ける地域の担い手を見出していく。“一人一人の絆を築くことからすべてが始まる”、まさに千里の道も一歩からということである。

讃州井筒屋敷

○土地柄を理解して根気よく対話してみる

～高知県室戸市吉良川地区～

室戸市吉良川地区が重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）の選定を受けると、建物の建替え補修に対しては制限がかかる。当然ながら、そのことについて建物の所有者の同意が必要になってくる。町並み保存会では、他の人の意見やアドバイスを受けながら、所有者と対立が生まれないように理解を求めるためにじっくりと努力を重ねた。そして、その対話の中で、敵対化しないコツもつかんでいった。そして、重伝建の選定間近には、ほぼ 9 割の住民から同意書を得るまでに至り、この活動が、地区住民の意識をひとつにまとめることに大きく貢献した。

吉良川の古いものを大切にする土地柄と保存会の根気強い対話が連帯意識を生んだのである。

○そうすることの意義を何度も話あう

～愛媛県宇和島市遊子地区～

「段畑」の回復と保全を説く行政と「段畑を守ろう会」に対して、当初地元の人たちは、「文化や景観で飯が食えるのか！」とあまり乗り気ではなかった。水荷浦は約 40 戸の集落で漁業で生計をたてている家は 10 戸程度、以前と比較して衰退傾向にある。漁業経験者は、かつて漁獲量が多かった時代の生活の意識が根強い。

段畑の地権者と農地の復元と保全、段畑を後世に残していくことの意義を何度も話しあい、「段畑を守ろう会」は、「ふるさとだんだん祭り」やコンサートを行いながら、視察の案内など小さなことから根気強く活動していった。結局、重要文化的景観の指定申請の同意を得るまでには６年かかった。行政と地元の議論は延々と続き、最後は市長自らが地域の人を集めて、協力を求め説得し、多くの地権者の了解を得るに至った。

ふるさとだんだん祭り

■自立（自律）の精神を育てる

地域での活動は自立的であること、自らが暮らす地域を自らが育てていくという意識が重要である。行政や専門家に頼るのではなく、行政や専門家を活用するという考え方が必要である。

○企画段階から自分たちの思いを固めておく

～徳島県名西郡神山町～

神山町では、アリスの里帰りによって、外国人を含めて何かやりたいと活動の方向性を模索し始める。1996 年、徳島県の新長期ビジョン「国際文化村構想」を知り、将来的には必ず、住民自身が管理運営をするような時代がやってくるであろうと考えた。そして、企画の段階から自分達の思いを込めておかないと面白いものができないし、いざ自分達が管理運営する時になったとしても、使い勝手が悪いものなるに違いない。そこで、国際交流協会の中に新たな会を組織して、自分達が何をやりたいか自分たちに何ができるか、という議論を進めた。

○補助金に頼らないなど、自律を第一とする

～愛媛県喜多郡内子町石畳地区～

「石畳を思う会」の結成のきっかけをつくった岡田さんは、当初、地元の人々に地域の自立（自律）を投げかけた。

「補助金にぶら下がっているから、こんなに農村は寂れた」

「自立（自律）しろ」「自分のことは自分でやれ」

この岡田さんのメッセージをきっかけに、地域の存続を危惧した地区住民ら有志 12 名で「石畳を思う会」が結成された。思う会は「補助金に頼らない」「会則を設けない」「役員任期を定めない」という自立した集団として活動していくことを旨としたことが、現在の評価や活動の発展や継続につながっている。

「石畳を思う会」の基本理念
１、会則を持たない。
２、補助に頼らず自立する。
３、多数決制をとらず、提案者がリーダーとなって活動する。

水車小屋

■イメージを伝え、戦略的に発信する

地域のイメージをどのように伝えるのか。わかりやすく、楽しく、行ってみたいと感じるような情報はどのようなものか。情報の受け手をイメージして、戦略性を持って発信することが必要である。

○人の心を動かすイメージ戦略を考える

～高知県幡多郡黒潮町～

砂浜美術館の情報は、チラシをはじめとする印刷物や雑誌、新聞、インターネットなど様々なメディアを通じて発信されている。四国からの情報に人々の心が動かされるようにするためには、コンセプトをわかりやすく伝える戦略が必要である。そのため、砂浜美術館ではイメージをつくるデザイナーの力を借りて、押し付けにならない、さりげなさで人々が自ら気づくような情報発信を心がけている。

○高い評価を受け、地域の自信と誇り、やる気を生み出す

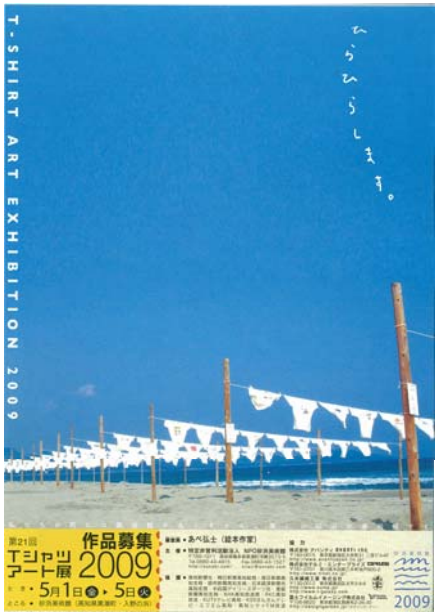
～愛媛県喜多郡内子町石畳地区～

自分たちの活動が評価され、全国に知られるようになった石畳地区であるが、その情報発信に際しては「取り上げてもらうなら、ちゃんとした専門誌で取り上げてもらいたい」と旅行雑誌や芸能人の番組ではなく、地域のドキュメンタリーなどで紹介されることを大事にしている。一時の流行りではなく、高いレベルで「ちゃんとした評価」をうけることが地域に自信と誇りをもたらすのである。

○イマジネーションを広げ、戦略的に発信することを考える

～徳島県名西郡神山町～

神山を英語で表すと「God's Mountain」である。外国人（特に欧米人）は神話が大好きで、「God's Mountain」で作品を作ると言うとイマジネーションの広がりを感じるのである。海外向け広報の文章に大宣都比売（おおげつひめ）や古事記の話を入れてあると、やってきた外国人が作品を作るテーマそのものがこれに影響されることもある。



砂浜美術館のイメージ戦略